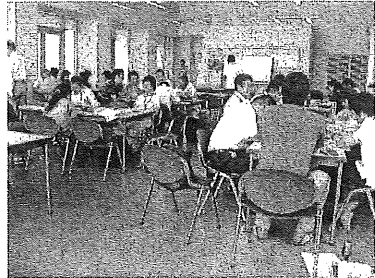


分科会E 「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発①

講師 上智大学教授
愛知教育大学准教授

奈須正裕 兵庫教育大学大学院教授 佐藤 真
久野弘幸



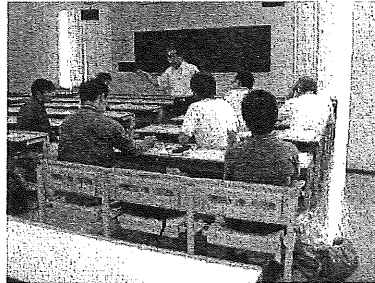
ののだと思っていたが、実際には目標と育てようとする資質や能力及び態度、内容の3つを行きつ戻りつしながらカリキュラム作りをしていくということを知った。

また、これも取り組みながら分かったことだが、仮想とは言え、事前に作り上げた子どもの姿を思い描きながら進めていったので、カリキュラム作りは机上でできあがるのではなく、目の前の子どもの姿から作り上げていくのだという思いを強くした。最後に、グループごとにカリキュラムをプレゼンしたが、どのグループも子どもの姿からカリキュラムを語っており、参加者全員が子どもの姿からカリキュラムを作り上げていくということが理解できたように思った。(文責 中田・埼玉)

分科会F 学習パッケージの開発②

講師 岐阜聖徳学園大学教授
神戸国際大学客員教授

成田幸夫 岐阜聖徳学園大学講師 宮川啓一
加藤幸次



第2日目(8月8日)は、まず前半に、岐阜聖徳学園大学の宮川啓一先生から、中学校での「コース別学習」の実践をもとに、パッケージ学習に取り組む子どもたちのよさ、とりわけ学習の主体者としての学ぶ姿のすばらしさを中心にお話をさせていただきました。

後半は、分科会を2つのグループに分けて、成田先生・宮川先生を中心に協議をおこなったり、「学習環境づくり」の分科会を見て回ったりしながら、この学習のよさを深めていきました。

この「学習パッケージ」による単元内自由進度学習が、そのよさを実感しながら一人でも多くの先生方が取り組んでくださり、広がっていくことを期待したいものです。(文責 池田・九州)

分科会G 学習環境づくり

講師 東京学芸大学講師 佐野亮子
実践協力 東浦町立石浜西小学校教諭 竹内淑子

上智大学准教授 澤田 稔



G分科会では、愛知県東浦町立石浜西小学校の先生方による「チーム石浜」と佐野亮子先生、澤田稔先生が日頃の実践をもとに「学習環境」のワークショップを行いました。ワークショップは石浜西小「〇〇学習」スタイルの課題を参加の先生方が子どもと同じように一人学びですすめていくものでした。「体感する・目で楽しむ・手をうごかす・発想する・立体的に理解する・自分でたしかめる」などわくわく、どきどきする教材ばかりでした。学習カードも子どもの学びを丁寧に見取ったもとだと感じました。また、学習環境の素材も独創的、創造的で子どもの知的好奇心をそそるものばかりでした。子どもの一人学びが成立するためには、確かな教材研究を土台に、先生方のチームワークと遊び心が必要なのだと思わせてくれました。

実際にチャレンジしてみて、成功して担当の先生からチェックをもらったり、がんばったと声をかけられたりすると子どもと同じくうれしくなりました。子どもの気持ちを体験することができたワークショップでした。

協議会では、佐野先生と澤田先生がワークショップで取り組んだ参加者の様子を子ども目線で分析されました。その的確で鋭い指摘から、日頃の子どもの学びをどのように見取っていけばいいのかを深く考えた分科会でした。(文責 石澤・東北)

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
庶務部長 佐久間 茂和
〒114-0003 東京都北区豊島 8-27
フレッシュ王子神谷 2-914
tel03-3912-2797
e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp
日本個性化教育学会ホームページ
http://zenkoren.com/

日本個性化教育学会 第11号
平成22年 10月16日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 中田 泰志

日本個性化教育学会

発行

平成22年10月16日

発行責任者

加藤 幸次

日本個性化教育学会報

第11号

今回の会報では、8月7日、8日に神戸国際大学で開催された第3回全国大会の様について報告します。なお、紙幅の都合により、シンポジウムについては次号で報告いたします。

また、会期中に開催された理事会及び会務総会において、**第4回全国大会は、2011年8月20日(土)、21日(日)の両日に、東京都千代田区の上智大学四ッ谷キャンパスで開催することになりましたので、お知らせいたします。**詳細については追ってご案内申し上げますが、まずは日程の確保をよろしくお願いいたします。

日本個性化教育学会第3回全国大会

国際的視野に立った真の学力観

1 期日 2010年8月7日(土) 8日(日)

2 場所 神戸国際大学

3 日程

8/7(土)

9:30～ 開会式

9:40～ 基調講演「現代の高等教育の課題」

～ピサ(PISA)の求める学力と日本の教育～

国立大学協会専務理事 前神戸大学学長 野上智行

四国個性化教育学会会長 長尾順二

11:10～特別講演「映像に見る教師像」

13:30～実践報告・研究協議

分科会A 「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発①

分科会B 学習パッケージの開発②

分科会C 小・中学校における理科教材の開発

分科会D 幼稚園・保育所と小学校・中学校の連携

8/8(日)

9:20～実践報告・研究協議

分科会E 「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発②

分科会F 学習パッケージの開発②

分科会G 学習環境づくり

13:30～シンポジウム

テーマ：学力観をめぐっての比較考察～個をどうとらえるか～

○コーディネーター ・近大姫路大学教授・神戸大学名誉教授 鈴木正幸

○パネラー ・共立女子学園大学常務理事局長 辻村哲夫

・神戸大学教授 今谷順重

・神戸国際大学客員教授 加藤幸次

16:20～閉会式

基調講演「現代の高等教育の課題」

～ピサ(PISA)の求める学力と日本の教育～

国立大学協会専務理事 前神戸大学学長 野上智行

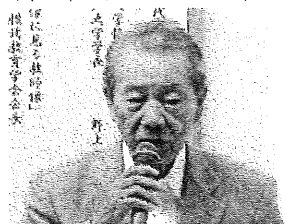
研究大会の初日は、野上智行先生から「現代の高等教育の課題～ピサ(PISA)の求める学力と日本の教育」について現状の解説及びこれからの課題について講演をしていただいた。

まず「教育基盤の急速な劣化」として、少子高齢化の現状を様々な視点から解説された。特に家庭の経済力が年々下降し、教育の機会に格差が出ている事実をあらゆる角度からのデータで解説された。想像以上に親の年収中間層が落ちている事実 realism を感じた。データの中には教師の意識調査もあり「授業の準備をする時間が足りないと感じている」(91.7%)「教師

が行うべき仕事が多すぎると感じている」(92%)「教員以外の専門スタッフのしめる割合」が米国英国(57%)に比べ20%と少ない点も解説された。同時にPISAにおける読解力の実態「自分の言葉で意見が書けない」と経団連が求めている人材「人材は世界中から」を関連させて、今の大学生の就職意識・就活と大学のあるべき姿について述べられた。

なかでも現代は「勤労意識・マナー・キャリア意識について意識させていないのは大学として認められない」時代である事例を解説されていた。今や大学は学問をする場ではなく、就活の場になっている。奇しくも17日に日本学術会議は「卒業数年は新卒扱いを・地方学生の就活費補助等」提言を文科省に提出した。実際ヘリコプターペアレックスに依存している学生に対し、我々教員は気持ちの面できっちり支えていかなくてはならないと結ばれた。(文責 加藤・千葉)

特別講演「映像に見る教師像」



四国個性化教育学会会長 長尾順二
長尾先生の映画に見える教師像の講演は、ここ数年の日本個性化教育学会の名物になっている。日本映画と西洋映画に見える教師像を、「映画の鬼」とでもいうべき長尾先生によって、時代に添って整理され、映画以上に熱い思いのある教育者としての立場として、熱く語る姿と内容は、名物にふさわしい講演となった。昨年度は西洋の映画に見える教師像だったが、今年の講演は、評判だった一昨年の講演のリクエストに応えていただいたリメイク版となった。しかし、決して繰り返してない素晴らしい講演であった。

日本の教育界と世情を熟知した長尾先生が、映画の中で描かれてきた、実は大衆や知識人たちが思い描いた教師像や彼らが理想としていた教師像を分析し、明らかにしていく。一つ一つの作品とその作品の時代背景、そこに描かれた教師像について、きつと、たくさん語ったかったと推察される膨大な知識や情報量の中から、我々にわかりやすいように言葉を選んで語っていただいた。最後にDVDで見せていただいた「二十四の瞳」への長尾先生の熱い思いと平和への願いも、聞く人に強く伝わってきた。

長尾先生がすごいのは、懐古趣味の映画ファンではなく、「金八先生」「学校シリーズ」「ごくせん」まで、網羅している、現役バリバリの映画ファンであることであろう。今年も、感心し心を打たれた講演となった。(文責 佐久間・東京)

実践報告・研究協議

分科会A 「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発①

発表者 神戸市立向洋中学校教諭 藤本博嗣 指導助言 上智大学教授 奈須正裕
高知市立横内小学校教諭 野村ゆかり 兵庫教育大学大学院教授 佐藤 真
愛知教育大学准教授 久野弘幸



二日間の日程のうち初日は2人の発表者の実践から学び、翌日は、参加者でグループを作り、仮想の学校の総合のカリキュラムを作るという、今までにないワークショップだった。

初日には、神戸市立向洋中学校の藤本先生と高知市立横内小学校の野村先生からの実践発表があった。

藤本先生からは、兵庫県の中学校の取り組みとして有名な「トライやるウィーク」に絡めて進路指導を中心とした単元配列による実践を報告された。藤本先生の実践の特徴は、新人生説明会である。これは、来年度入学する新入生に向けて、生徒自ら分担して原稿作りや資料作り、発表を行うという取り組みである。指導者からは、中学校では、進路指導が大きなウェイトを占めるので、それと連携した取り組みは現実的であるというコメントをもらった。



野村先生からは、2006年からスタートした食育を中心とした実践を報告された。地場産の食材を使用した給食のメニュー作りに取り組んだ子ども達だったが、様々な問題に出会い、なかなか思うように採用にならない。しかし、その中で自分たちの力を合わせて問題を乗り越えていこうとする姿がみられ、そこに大人も動かされていった。活動の流れが自然で、子ども達の求めに沿って自然に問題解決的な学習が組み込まれるとともに、様々な人々がそこに関わっていくという良い実践例だった。

指導者の佐藤真先生からは、つながっていくことが大切だという、重要なキーワードをいただいた。人や物などいろいろなものとのつながっていく、それがカリキュラムであるとして、カリキュラム作りの一つのヒントをいただいた。(文責 中田・埼玉)

分科会B 学習パッケージの開発①

発表者 宝塚市山手台小学校教諭 岩崎純子 指導助言 岐阜聖徳学園大学教授 成田幸夫
東浦町立東浦中学校教諭 竹内 学 岐阜聖徳学園大学講師 宮川啓一
福岡市立堅粕小学校教諭 肝付幸枝 神戸国際大学客員教授 加藤幸次



第1日目(8月7日)は、まず加藤幸次先生より本分科会の大きな流れや学習パッケージについてお話をいただきました。

そして、前半は3人の先生方からそれぞれの実践を紹介していただきました。山手台小学校の岩崎純子先生は、「Let's talk お笑いイングリッシュ!」と題して、英語活動の取り組みを発表していただきました。単なるチャンツ・ゲームだけではなく、学習活動の中に「調べる・探求する」活動や「身につける」活動、そして「実践する」活動を取り入れていました。「実践する」活動では、京都の金閣寺に行つて外国から来た人々に実際に話しかけるといふものです。

東浦中学校の竹内学先生は、「2科目同時進行単元内自由進度学習」と題して、体育学習の取り組みを発表していただきました。体育「マツト運動」と保健「感染症の予防」の2科目を、それぞれ「学習の手びき」をもとに教科書や学習カードなどを駆使して、一人学びで学習を進めるというものです。

堅粕小学校の肝付幸枝先生は、「一人ひとりの子どもが自ら学ぶ喜びを味わう、個別パッケージ学習の実践」と題して、算数・理科の取り組みを発表していただきました。算数「図形の角」と理科「ふりこの動き」の2単



元を、「学習の手びき」をもとに学習の順序や実験の仕方を自分で選択しながら学習を進めるといふものです。

後半は、岐阜聖徳学園大学の成田幸夫先生が、これまでの豊富な実践をもとに、「教科学習における学習内容と方法の検討から自立的な学びをめざす」ことや「問題解決の過程をていねいに扱う」ことなどのお話をしていただきました。(文責 池田・九州)

分科会C 小・中学校における理科教材の開発

発表者 神戸大学附属住吉中学校教諭 佐藤美子 指導助言 近大姫路大学准教授 内山裕之
大阪府立西寝屋川高校教諭 岩野 翼
京都市立洛陽工業高校教諭 畑 宗平

分科会Cでは、理科教材の開発をテーマに「個々の考える力を引き出す実験活動ーマイクロスケール実験を活用した学習を例にー」と「米国科学教育を活用した小学校理科における健康教育の試み」、「日本におけるケーススタディーーCASEを考慮した理科の探究学習を実現するための教授法の開発」の3本の報告がありました。

「個々の考える力を引き出す実験活動ーマイクロスケール実験を活用した学習を例にー」

小学校理科(6年生)で扱う「水溶液の性質」「だ液の働き」の2つの実験を例に、実験時間の短縮と個別実験を可能にしたマイクロスケール実験の実践を紹介していただきました。会場に実験道具を持ち込んでくださり、参加者も実験をしてみるというスタイルでのご発表で、個々の活動場面を増やすことで考える力を引き出し、実験に対する責任能力と結果を伝えるコミュニケーション能力の育成をねらった、マイクロスケール実験の有効性・可能性を実感することができました。

「米国科学教育を活用した小学校理科における健康教育の試み」

理科の学習を「学習のための学習」で終わらせることなく、「学ぶ意義・重要性を実感できる学習」にするための一つの方策として、米国科学教育を活用した「健康」についての実践事例が紹介されました。調べ学習が中心になりがちな単元ではありますが「探求活動」「イメージーション」「思考活動」「描画活動」という構成で組み立て、活動に重点をおいた単元構成とすることで、子どもたちが学ぶ意義を実感できるような学びの姿が報告されました。クロスカリキュラムにすることにより、教師の思惑を超えて意外な子どもの学びが見られたということなど、クロスカリキュラムの可能性について多くの示唆がありました。

「日本におけるケーススタディーーCASEを考慮した理科の探究学習を実現するための教授法の開発」

CASEとは英国で1980年代半ばの開発された「科学教育による認知的加速(Cognitive Acceleration through Science Education)」を目的にしたプログラムです。日本の学校教育でこの教材の使用を考慮した授業を計画する場合を想定し、探究学習の授業形態での活用が提案されました。探究力を向上させるために「定量化(変化の数値化による比較)」を探究過程の必須項目として設定し、具体的な五感中心主義による主観的な認識パターンから、抽象的な定量測定中心主義による客観的な認識パターンへの移行を促し、認知力と探究力を向上させることができるというご提案でした。(文責 加藤・関西)



分科会D 幼稚園・保育所と小学校・中学校の連携

発表者 姫路市立旭陽幼稚園園長 中村君子 指導助言 近大姫路大学教授 鈴木正幸
仙台市教育センター 菊地修治
近大姫路大学教授 戸江茂博
津田このみ保育園園長 井上裕子



幼稚園・保育所と小学校・中学校など学校間の連携は、今後とても重要になってくる取り組みだと言える。分科会では、幼稚園や保育所でのユニークな取り組みが報告された。

まず、旭陽幼稚園の中村先生からは、姫路市が独自に作成している「姫路市幼児教育共通カリキュラム」を使った、小学校との交流の取り組みについて報告された。実践紹介では、1年生との遊びの交流や小学校の全校集会への参加を通して、相互に親しみをもち、交流を深める様子がよく現れていた。また、子どもだけでなく、教職員にとっても児童理解を深める良い手立てになった。



仙台市教育センターの菊地先生からは、スタートカリキュラムの取り組みが報告された。幼稚園や保育所を卒園して、小学校に入学する際に生活面でのギャップから、登校を渋ったり欠席するといったことが小学校1年生では、課題として上げられる。仙台市では、スタートカリキュラムという、小学1年生ギャップとも言うべきこの問題にカリキュラムレベルでの対応をしている。具体的には、生活科を核にした単元構成を行い、小学校生活への適応をスムーズにするものである。登校渋りがゼロという結果にはとても驚いた。

津田このみ保育園の井上先生からは、旭陽幼稚園と同様に姫路市幼児教育共通カリキュラムを使った、取り組みが紹介された。小学校から保育所の保護者に向けての説明会や、勉強会、意見交換を始め、特別活動や給食などにも一緒に参加するという取り組みを行っている。

これらの取り組みから、学校間の連携を工夫してスムーズにすることで、子ども達が不安を感じずに過ごせる取り組みが今後とも多くの学校、幼稚園、保育所で必要になってくることを感じた。

(文責 中田・埼玉)